

## コマンド・ガールズ 4

ケネス・ハートフォードの映画「HELL SQUAD」より



—— 冷戦時代から中東は当時から世界の火薬庫だった。

ン連の後押しを受けたテロリストたちと、西側と同盟する勢力とが、砂漠のあちこちで衝突していた。

テロリストの一味が、米国大使の子息を誘拐する事件は、そんな最中に起こった。

テロリストの要求に屈すれば、世界は破滅へと向かうことは明らかだったが、だが、悪が栄えた試しはない。

**世界最強の美女たちが、**

邪悪な企てを阻止すべく立ち上がるはずだった。

## 登場人物

### ジャン

27歳。元CIA。身長174センチ。鮮やかなストレートの金髪。プレイメイトを思わせるワイルドな美貌。

### ティナ

25歳。いちばんの長身で180センチ。北欧系の端正な美女。ちょっと皮肉屋だが冷静なリーダー格。

### モーリーン

25歳。ショートカット。ラテンの血が混じった情熱的な潤んだ眼。身長は178センチ

### リサ

20歳。赤毛。十三歳で家出。パンク歌手のような鋭い顔つきに、油断のない向上心に溢れた眼。

### ローレン

21歳。東部の出身。マサチューセッツ工科大学中退。典型的なワスプ顔で教養がある。

### キャシー

18歳。カンザス出身。田舎くさく、白い肌にちよつとだけソバカスが残る。1メートルを越える、いちばんの巨乳。



二日後。

林の向こうに、三台の戦車と、五つほどの軍用テントが張られていた。

三台の戦車は、それぞれ数十メートルの間隔を置いて並べてある。歩哨は一人ずつついていた。そこから離れた位置に数人のアラブ兵がたむろして煙草を吸いながら談笑していた。

「ソ連製だわ」

樹の陰に隠れていたティナがモーリーンに囁いた。

「歩哨は一人よ。うまくいきそうね」

「モーリーン、いつもの手ね。わかった？」

「また、おっぱい見せるの？」

「悔しいけど、男にとってあんたがいちばん刺激的なの。とくに戒律の厳しいアラブの男にはね」

ティナとモーリーン以外の四人の美女たちは、ジープで林を迂回して、軍用テントに近い茂みに潜んでいた。

反対側の林のなかから、モーリーンが出てきて、戦車の歩哨に背後から忍び寄った。体をくねらせ、モンローウォークで。

歩哨が振り向いた。銃を構えようとしてハツとした。

モーリーンは、ぱつとスポーツブラをたくしあげた。歩哨は思わず、涎を垂らさんばかりの表情でふらふらとモーリーンに接近した。

そのとき、彼の背後からティナが喉に腕を回した。歩哨はのけぞった。

モーリーンが、歩哨の開いた両脚のつけ根をたてつづけに四度、蹴り上げた。兵士は失神し、ぐったりと地面に這いつくばった。ティナがその喉笛を踏みつぶして息の根を止め、林に向かつて引きずった。

「久しぶりの再会ね、ソ連製さん」

戦車の砲塔にもぐり込み、座席に座ったティナは、ハンドルにキスした。モーリーンは笑った。

「シートベルト着用を忘れずに」

ティナはウィンクした。

「でもスピード制限無視はお見逃しね」

一台の戦車の砲塔がゆっくりと回転した。談笑していたアラブ兵たちは、いつせいに戦車を見た。

砲身の先端が火を噴いた。たちまち、一台の戦車が吹っ飛び、炎に包まれた。傍らの兵士が火だるまになって地面に転がった。

アラブ兵たちは動転した。残る一台も、瞬く間に砲弾を浴び、火を噴きながら横転した。歩哨の兵士はその下敷きになった。

軍用テントからワラワラと飛び出してきた。

「やったあ！」

ティナとモーリーンは戦車のなかでハイタッチした。

「訓練の甲斐があったわね」

「うふふ……帰国したらあの戦車兵さんたちに、もつとたつぷりお礼をしてあげなきゃ……」

「いくわよ！」

すでに四人の美女たちはジープに乗り込んでいた。ジャンの合図に、美女たちは機関銃を構えた。

アクセルが踏まれた。ジープは軍用テントめがけて突進し、機関銃が水平射撃で飛び出してきたアラブ兵たちをなぎ倒した。

「ええ……いなかったわ。ええ、ええ……」

浴室では、五人の美女たちが疲れを癒すためにバスタブで泡にまみれている。ジャンは一人、メインルームの受話器に向かって喋っていた。

「そう、死体は四十人ほどあつたけど、全部軍服の兵士よ」

ジャンは、苛立たしげに叫んだ。

——そうか。

受話器の向こうで硬質な男の声が響いた。

——では、次の指令を伝える。

「ちよつと待って」

ジャンは遮った。

「これまで四日間ぶつつづけで、数え切れないくらいのアラブ人を殺した。全部兵士だったわ。テロリストらしい男はいなかったのよ！」

——それがどうした？

「私が聞いているかぎり、誘拐したのはテロリストで、軍じゃないと……」

——ジャン、命令に従え。

受話器の男は冷たく言った。

「了解」

ジャンは不承不承うなずいた。

「でも、攻撃時間はずらしてくれないかしら。ホテルに着いてからまだ踊っていないの。ホテル側も怪しみはじめてるわ」

地下一階のレストランの特設ステージで、ティナ、モーリン、リサ、ローレン、キャシーの五人が、黒いビキニのコスチュームで、腰をくねらせて踊っていた。

「いや、すばらしい」

客に混じってテーブルでステージを見入っていたジャンの隣に、ホテルのオーナーのクーガンが腰をおろした。五十歳。白髪まじりのアメリカ人である。

「本国でもこれだけ粒揃いのステージは、滅多にないだろうな。ジャン、君と契約してほんとうによかった」

「ありがとうございます。クーガンさん」

ジャンは、にっこり笑い、それから周囲を見回した。

「それにしても、中東は戒律が厳しいと聞いてましたけど……」

白いターバンを巻いたアラブの富豪たちが、酒杯を手に、食い入るように半裸の白人美女たちに見入っていた。

「何事にも抜け道はあるさ。あれを……」

クーガンが目で指し示した方に、両脇にアジア系のホステスを従えた数人のアラブ人がいた。

「クエートの王族だ。オイルマネーで贅沢三昧。国民は貧困に喘いでいるというのに、週末には戒律の厳しい国を出て、比較的規制のゆるやかなこの国で、酒池肉林だ。あれじゃ、他の国の反感を買うぞ」

「でも、あなたにとってはいちばんのお客様でしょう？」

「まあそういうことだ。豊富な石油資源のおこぼれが、私のところにも回ってくるというわけさ」

「クエート万歳ね」

「いや、ここでいちばんお金を落とすしていくのは、あの人だよ」

クーガンが目配せした先にデブプリと太ったアラブ人が、厚い唇を嘗めまわしながら、ステー

ジのショーガール一人一人に視線を漂わせ、卑猥な笑いを浮かべていた。

「シークという、この国でも指折りの金持ちだ。いろいろとよくない噂もあるが、金離れはいい。

アラブ人はとにかく値切りたがる。クエートの王族も例外ではない。だが、シークは、こちらの言い値どおりに払ってくれるんだよ」

翌日の夜。

電話のベルが鳴った。

「また出勤命令？」

隣のベッドでティナが眠そうな声をあげた。

「たぶんね」

ジャンは目をこすりながらベッドを這い出し、パンティー一枚のみごとなボディをさらけ出しながら受話器をとった。

「はい……ええ……了解」

「やっぱり出勤なのね」

ティナは毛布から上半身だけを出し、両手を大きく伸ばして豊かな乳房を思い切り前に突き出して欠伸をした。

「そうよ。みんなを起こして」

その日の攻撃目標は、郊外にぼつんと聳える古ぼけたモスクだった。美女たちが突入し、引き上げたとき、モスクの内部には血祭りにあげられた数十のアラブ兵を死骸のみが転がっていた。だが、今日も、人質の影すら見つけることはできなかった。

夜明け。

任務を終えてホテルに戻った美女たちが昏々と眠っている頃、同じホテルの別の部屋の電話のベルが鳴った。

「もしもし」

髭面の男が受話器をとった。

「おれだ。準備は整っているか？」

「ああ……」

髭面の男は、ベッドから這い出し、ターバンを顔に巻き付けはじめた。

「敵の居場所が判明したのか？」

「ああ、よく聞け。敵はなんと君たちと同じホテルに泊まっていた。あのダンサーたちだ。

「女だど！」

——そうだ。六人いる。バーレムにいた君らの同志を全滅させて帰ってきたばかりだ。連日の

攻撃で疲労は極限に達している。殺すな。生かして連れてくるんだ。

ドアが静かに開いた。

「起きろ」

冷たい銃口の感触を額に感じたジャンが目を覚ましたとき、目の前にライフルを構えた十数人のターバンを顔に巻いた男たちが自分たちを囲んでいることを悟った。

「お早う、やっとテロリストのお出ましね」

ジャンは精一杯の皮肉を放ったが、男たちは無言で、立て、と手で合図をした。

寝込みを襲われた美女たちは、抵抗する暇もなく、連れ去られた。

「シーク！」

やっと思隠しを外されたジャンは、思わずその名を口にした。

ホテルのレストランでクーガンに教わったその人が、白いアラブ服を身にまとい、水煙草をくわえて、美女たちを眺め回していた。シークの両脇に、屈強なアラブ兵がひとり立っていた。

ホテルの部屋を急襲されてから、目かくしをされたまま車で移動させられた。だから場所は分からないが、地下室らしい。打ちっぱなしのコンクリートが剥き出しの床や壁。ジャンたちは、冷たい壁を背中に、両手を鎖で縛られ、万歳したかっこうで固定され、横一列に並んでいた。

美女たちはみな、ベッドにいたときと同じスタイルだった。すなわち、パンティとTシャツのみ。女性の裸体を見慣れていないシークの部下の興奮しきった視線が、美女たちの剥き出しの脚や、Tシャツを押し上げている豊かな胸を、なめ回していた。

「いやいや、今日のご招待に承えていただいて、ありがとうございます」

シークは分厚い唇をいやらしくなめ回しながら、慇懃な口調で、右手を額、胸と移動させるアラブ式のお辞儀をしてみせた。

「ご招待をいただいた覚えはないわ」

ティナが言い返した。

「そうよ、銃で連行したくせに」

最年少のキャシーが、乳房を震わせて抗議した。

「ちよっと手荒い手段をとらせていただいたのは、それなりの理由があるからだ」

シークは表情を引き締めた。

「君らは何の目的でこの国に来た？ ダンサーなどではないことは分かっているんだ」

そのとき、地下室の扉が開いた。シークの部下が鎖を引っ張って、巨大な動物を部屋に運び入れた。

虎だった。凶暴な肉食獣だった。

シークの部下は、わざと美女たちの前を通ってシークの足元に虎を寝そべらせた。美女たちも

思わず、息を呑んだ。

「こいつは、すでに十人を人間を食らった、獰猛な獣だ。素直に白状しないと、君たちはこいつの餌になる」

シークはニタリと笑い、傍らの部下に、「一人、連れてこい」と命じた。シークの部下は、軽く札をして、いちばん左端のジャンに近寄り、その手鎖を外し、うつ伏せに床に伏せるように仕種で示した。

ジャンはおとなしく、冷たい床に腹這いになった。

「火曜日は、御馳走の日なんだよ」

シークは、ジャンのパンティ一枚に覆われた引き締まった尻や、長くしなやかに延びた脚を堪能しながら、皮肉な口調で言った。

「今日は水曜日じゃないの？」

リサが挑発するように言った。シークが答えた。

「いや、火曜日だ」

「アラブ暦ではそうかもしれないわね」

ローレンが言った。

「でも、私たちアメリカ人とコミュニケーションするときには、西暦でお願いしたいわ」

「うるさい」

シークは怒鳴った。

「わしの兵がすでに百人以上、殺された。情報によれば、襲撃したのはいずれも、金髪の女性兵士だ。その人数も五人ないし七人との報告がある。お前らの仕業なんだろう！」

「まっさか〜」

モリーーンが潤んだ瞳を細めて、唇を突きだしてしなを作った。

「私たちはダンサーよ。そんな恐ろしいことできるはずがないじゃないの」

「嘘だ！」

シークは椅子から立ち上がり、足踏みをした。

「お前らの部屋から、銃と軍服が見つかっておる！ どう説明する！」

シークはまた、ドンと床を踏みならした。

「ステージ用のコスチュームなの」

キャシーが必死で叫んだ。

「わしはお前らのステージは見た。軍服も銃も使わなかった。つまり、お前らはアメリカのスパイだ！」

シークが太った足を持ち上げ、強く踏み下ろした。

その瞬間、寝そべっていた虎が一声、咆哮した。シークの分厚い靴が、虎の尻尾の上にあった。

「う……」

シークが気づいた時には遅かった。虎は、凄まじい唸り声をあげ、シークにのしかかった。猛獣の爪が、シークの顔を襲った。あやうくよけたが、顔面に斜めに三本、深い傷が走り、血が吹き出した。

シークの部下たちが、慌てて虎を引き剥がそうと駆け寄った。同時に、床に伏せていたジャンが撥ね起きた。

「食らえ！」

ジャンは、部下の一人の背後から、股間を蹴りあげた。爪先が、骨盤にのめりこみ、鞣丸を一撃で砕いた。男は血反吐をはいて倒れた。

もう一人の男が、銃を構えてジャンに狙いをつけた。だが、引き金をひくより早く、ジャンのハイキックが男の手首を襲った。銃が宙を待って床に落ちた瞬間には、ジャンは相手の懐に飛び込み、股間をぎゅっとつかんでいた。

男が苦痛に顔を歪め、悲鳴をあげた。ジャンは容赦なく、鞣丸を二つとも、握り潰した。

それから、彼女は床にくずおれた部下たちのポケットを探り、鍵を探し出した。まず、ティナの鎖を外した。

「ジャン！」

モリーーンが叫んだ。

「一人、来たわ！」



扉が開き、悲鳴を聞きつけたシークの部下が一人、飛び込んできた。

「私に任せて！」

ティナが叫び、シークの部下の脇腹に水平蹴りを浴びせた。

「任せたわ！」

ジャンは、残る四人の鎖を外しにかかった。

シークの部下は、ティナの蹴りを浴びてよろめいたが、さっとナイフを抜いて対峙した。男は小柄だった。180センチのティナの、肩くらいの身長しかない。

「やっ！」

ティナは、長い脚を伸ばして、男の股間を打った。男はナイフを横薙ぎに払ったが、手が短く、彼女までは届かない。

「ほら！」

ティナはもう一度、同じ箇所を蹴った。男は悲鳴をあげ、ナイフを取り落とし、両手で股間を押さえて床に膝をついた。ティナはその鼻っ先を蹴った。男は仰向けに倒れた。ティナは男の股間を踏みつけ、踵に全体重を載せた。男の睾丸はティナの体重を支え切れず、破裂した。

さらに、三人のアラブ人が駆け込んできたが、自由になった美女たちの敵ではなかった。次々と男たちは美女たちのリンチにあい、血まみれになって床に転がった。

「助けてくれ！」

虎に押さえつけられたシークが悲鳴をあげた。

「いやよ！」

ジャンは腕組みして怒鳴った。

「礼儀知らずの男を助ける気はないわ」

「今日は火曜日なんですよ、あなたたちの暦では」

ティナが皮肉な口調であざ笑った。

「私たちより、あなたのほうが食べどろがありそうよ」

「ちよっとカロリーオーバーだけどね」

ローレンが笑った。

「た、頼む……なんでも言うことを聞くから」

シークが、虎の下で涙声を絞りあげた。

「オッケー。そのかわり条件があるわ。大使の息子は、どこにいるの？」

「う……」

「言いなさい。言わないと、助けてあげないわよ！」

「アマルにあるわしの別荘だ！」

シークは必死で絶叫した。

「別荘？ アマルのどこにあるの？」

「街から北に一キロほど郊外だ」

「別荘のどこ？」

「地下室だ！」

「そこに、あなたの部下は何人いるの？」

「五人だ……頼む。助けてくれえ！」

「行くわよ」

ジャンは、シークの部下たちの取り落としたライフルやナイフを拾い上げ、美女たちに配ると、さっさと踵を返して扉に向かった。美女たちも彼女に従った。シークが悲鳴をあげた。

「ま、待て……おい……助けてくれえ！ 助けてくれえ！」